

目次

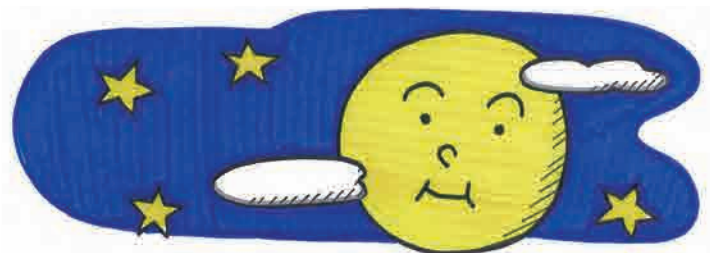
- 1 はじめのうた
- 2 季節のカード (ことば編)
- 3 童 謡 冬景色
- 4 回 文 良き月夜
- 5 今月の詩 時計 萩原朔太郎
- 6 たし算 9の段
- 7 ことわざ 身から出たさび 三つ子の魂百まで
水清ければ魚棲まず 無用の長物 昔とった杵柄
- 8 かけ算 同じかけ算
- 9 俳 句 与謝蕪村 松尾芭蕉 正岡子規
- 10 かぞえうた 4膳 8膳 12膳 (箸)
- 11 なぞなぞ
- 12 手あそびうた アルプス一万尺
- 13 今月のうた 反対あいうえお
- 14 慣用句 水を差す 角が立つ 胸に刻む
- 15 イメージトレーニング スティーム (第9話 オメガ星団)
(イメージしてみましよう)
- 16 おはなし 海の水はなぜ塩からい
- 17 漢 詩 獵を觀る
- 18 百人一首 寂蓮法師 紀貫之 待賢門院堀川 式子内親王
- 19 復習コーナー
- 20 暗 示 (静かなところで目を閉じて聞きましょう)

回 文

よ 良 ぎ 月 つ き よ 夜



よ	き	つ	き	よ
---	---	---	---	---

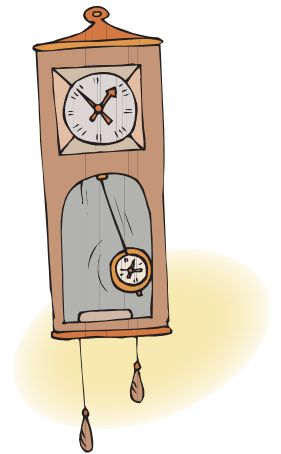


と けい
時 計

はぎわらさくたろう
萩原朔太郎

ふる 古いさびしい あき や なか 空家の中で
い す ぼう ぜん 椅子が茫然として居るではないか。
う え こ し その上に腰をかけて
あ み も の 編物をしてゐる娘もなく
だ ん ろ す わ くろ ね こ すが た み 暖炉に坐る黒猫の姿も見えない
しろ 白いがらんだうの家の中で
わ た し も の が な ゆ め 私は物悲しい夢をみながら
こ ふ う は し ら ど けい 古風な柱時計のほどけて行く
さ 錆びたぜんまいの響を聴いた。
じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん ! じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん !

ふる 古いさびしい あき や なか 空家の中で
む か し こ い び ど し ゃ し ん み 昔の恋人の写真を見てみた。
お も い だ き お く どこにも思ひ出す記憶がなく
ラ ン プ き い ろ ひ か り かげ 洋灯の黄色い光の影で
じ ょ う ね つ た だ よ っ い かなしい情熱だけが漂つてみた。
わ た し い す う え 私は椅子の上にまどろみながら
と お ひ と け ろ う か む こ 遠い人気のない廊下の向うを
ゆう れい よ 幽霊のやうにはごれてくる
は し ら ど けい き ひ び き 柱時計の錆びついた響を聴いた。
じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん ! じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん !



ことわざ

み 身から出た錆

自分のした悪い行いや過ちが原因で、あとで自分が苦しむこと。



み 三つ子の魂 百まで

幼い頃の性格や気質は一生変わらない。



み 水清ければ魚棲まず

あまりに清廉潔白すぎると、人に親しまれないこと。



お 無用の長物

あってもかえってじゃまになるもの。



お 昔取った杵柄

若い頃にきたえた得意の腕前。



俳句

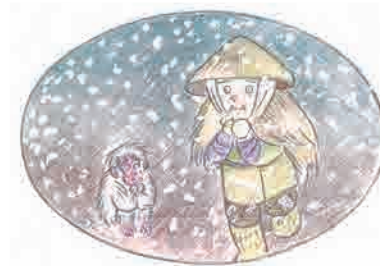
おのい 斧入れて 香におどろくや 冬木立

よきぶそん
与謝蕪村



はつ 初しぐれ さるこみの 猿も小蓑を ほしげなり

まつおばしょう
松尾芭蕉



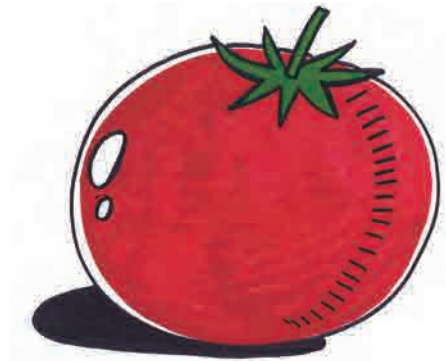
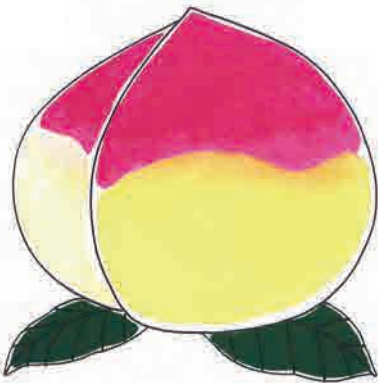
ぶつだん 仏壇の かし 菓子うつくしき どうじ 冬至かな

まさおかしき
正岡子規



なぜなぜ

- 1 上から読んでも下から読んでも同じ、夏の果物ななに？
- 2 さか立ちしても、名前のかわらない真っ赤な野菜はなに？
- 3 東西南北の中で、上から読んでも下から読んでも同じ方角はなに？
- 4 木に穴をあけるのがとくいな鳥はなに？



南
みなみ



手あそびうた

《アルプス一万尺》 いちまんじゃく

① ア



手を1かい
たたく。

② ル



みぎ手とみぎ手で
タッチ。

③ プ



①とおなじ。

④ ス



ひだり手とひだり手で
タッチ。

⑤ いち



①とおなじ。

⑥ まん



りょう手で
タッチ。

⑦ じゃ



①とおなじ。

⑧ く



手をくみ、手の
ひらをあいてにむけてタッチ。

⑨ こや



手を2かい
たたく。

⑩ り



みぎ手をたてて、
ひだり手でみぎの
ひじをさわる。

⑪ の



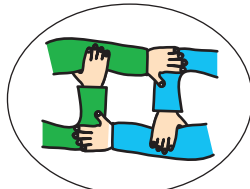
ひだり手をたてて、
みぎ手でひだりの
ひじをさわる。

⑫ う



こしに手を
あてる。

⑬ えで



うえからみると

みぎ手をじぶんのひだりの
ひじにのせ、ひだり手を
あいてのみぎのひじにのせる。

⑭ アルペンおどりを
さあ おどりましょう

①～⑬をくりかえす

⑮ ランランラン ランランラン
ランランラン ランランラン

①～⑬をくりかえす

⑯ ランランラン ランランラン
ランランランランラン ハイ

①～⑬をくりかえす

今月のうた

《^{はんたい}反対あいうえお》

んからはじまる

^{はんたい}反対 ^{はんたい}反対 あいうえお

さあ ^い言ってみよう

んをわ

ろれるりら

よゆや

もめむみま

ほへふひは

のねぬにな

とてつちた

そせすしさ

こけくきか

おえういあ

じょうずに ^い言えたかな



みず さ
水を差す

うまくいっていることに、わきからじゃまをする。



かど た
角が立つ

ひと あいだ おだ
人との間が、穏やかでなくなる。

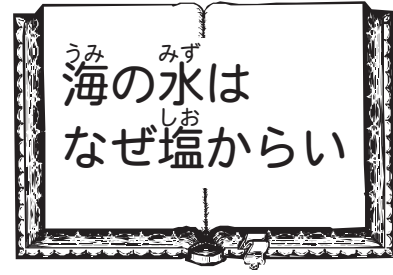


むね きざ
胸に刻む

しっかりと こころ 心にとどめる。よく おぼ 覚えておく。

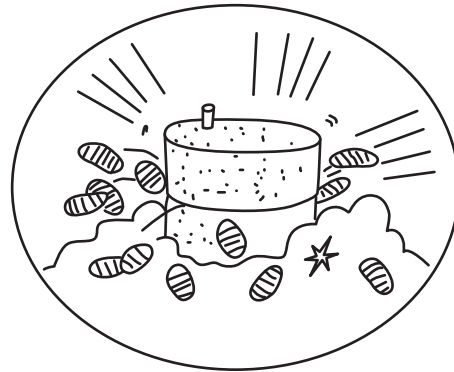


おはなし



このお話は、どうして海の水が塩からなくなったのかというお話です。お話を聞いた後で、質問にこたえてみましょう。

- 1 若者は海に出て、何を釣り上げましたか。
- 2 若者は、小さな神様たちの何と交換しましたか。
- 3 右に回すとどうなりましたか。
- 4 泥棒がお宝を盗み、舟の上で何を出しましたか。



獵を觀る

王

維

風勁くして 角弓鳴り
 將軍 渭城に獵す
 草枯れて 鷹眼疾く
 雪尽きて 馬蹄輕し
 忽ち新豊の市を過ぎ
 還た細柳の營に歸る
 雕を射し処を回看すれば
 千里暮雲 平らかなり



百人一首

村^{むら}雨^{さめ}の
露^{つゆ}も
霧^{きり}立ち^たのぼる
まだ干^ひぬまきの葉^はに
秋^{あき}の夕^{ゆう}暮^ぐれ

(寂蓮法師)

人^{ひと}はいさ
心^{こころ}も
花^{はな}ぞ昔^{むかし}の
香^かにほひける
知らず
ふるさと
は

(紀貫之)

長^{なが}からむ
心^{こころ}も
乱^{みだ}れ
今^け朝^さは
黒^{くろ}髪^{かみ}の
物^{もの}をこそ思^{おも}へ

(待賢門院堀川)

玉^{たま}の緒^およ
絶^たえなば
忍^{しの}ぶること
弱^{よわ}りもぞする
絶^たえね
ながらへば

(式子内親王)



紀貫之